

釈迦信仰と道元禪

石川力山

はじめに

鎌倉初期、叡山に勉強の場を求めながら禪に転じて入宋留学し、思想的には本覚思想とも対決し決別して、独自の思索的仏教を展開したとされる道元（一一〇〇～一五三）の思想を、平安末から鎌倉初期にかけての仏教史の中にどのように位置付けるかという課題については、天台教学史上の問題⁽¹⁾、禅宗思想史上の問題⁽²⁾、これらを踏まえた広い意味での仏教学研究上からのアプローチ⁽³⁾、さらに日本仏教の伝統、特にこの時期の主體的仏教受容として注目される遁世の上に位置付けようとする説など⁽⁴⁾、さまざまな試みがなされている。こうした多くの研究成果の蓄積があるにもかかわらず、鎌倉期という時代社会に生きた仏教実践者としての道元、信仰者としての道元の全体像はなかなか浮かび上がってこない。遁世僧としての位置付けにはかなりの説得性があり、その地平に見えてくる道元像には期待がもてるが、問題提起後の十分なフォロー

がなされていないように思われる。

言えることは、道元は平安期以来の仏教受容上の最大の課題であった「末法」という時代認識を、浄土教や阿弥陀仏への信仰帰依により克服したのではなく、どこまでも釈迦信仰の系譜に沿って行ったということである。そして、道元の釈迦信仰の経典としての根拠は勿論『法華経』であろうが、それは具体的に釈尊とのどのような共有世界を構築し得、また実践され表詮されているか。以下、道元の入宋求法の意味と、帰国後における思想と行動を関連させながら、どのような把握の仕方が可能かについての試論を提起してみたい。

渡天思想の系譜と道元の入宋

『三徂行業記』によれば、道元をして叡山を下り建仁寺に赴かしめる契機となったのは、三井寺の公胤の、「伝え聞く、大宋に仏心印を伝うる正宗有り、宜しく入宋求覓すべし」という誨励指示であり、その後師事した明全の入宋の志願を

決行させるに至る大きな要因も、この道元自身の入宋に対する熱烈な希求にあったのではないかという見方がある。しかし、果たしてこれだけの情報で禪に転じ、仏心印を伝える正宗を求めて命がけの渡航を決意する充分な動機となり得ようか。もちろん平安末から、商人や仏教者達による日宋彼我の往来は、宋国における禅宗の教団としての繁榮の様子は伝えていたであろうが、それがそのまま道元の禅宗への転宗、そして入宋求法の旅へと導く決定的な動機付けとなり得たとするには、これをさらに推進する大きな力を想定しないわけにはいかない。

ところで、明全の師である榮西（一一四一～一二二五）と道元が、直接対面していたかどうかという、いわゆる「榮西・道元相見説」については、諸種の状況から相見は行われなかったというのが一応の見解である。しかし、道元が榮西に対して特別の感懐を持って望んでいたことは、『正法眼蔵隨聞記』などの記事に端的に窺われる。しかも、そこではある意味で自未得度先度他の誓願に生きる菩薩行の実践者としての榮西像に終始している感があり、葉上流派祖としての密教者としての側面、あるいは東大寺の復興に尽くす国家仏教の奉仕者としての側面、さらには自ら大師号を朝廷に要請したとされるような榮西像（『愚管抄』『明月記』）は、完全に捨象されている。しかしそれは、榮西の実像を知らないが故の描き方

ではなく、熟知しているが故に、充分に意を用い取捨選択されて取りあげられていたと見るべきであろう。実像と虚像という捉え方もあるが、実は道元が捉えた榮西も、『愚管抄』などが伝える世に不評な側面も、いずれも榮西の一側面であった。

ところで、かつて榮西が第二回目の入宋で抱いていた素懐、すなわち『興禅護国論』で、

また次に、伝教大師の仏法相承譜を見て、我が山に稟承有りしことを知る。畜念罷まず。二十年を経て、方今予西天の八塔を礼せんと懐ふ。日本文治三年丁未の歲（一一八七）春三月、郷を辞し、諸宗の血脈、ならびに西域の方誌を帶して、宋朝に至る。初め行在臨安府に到って安撫侍郎に謁し、西乾經遊の情を覆す。すなはち下状に云く、

半影を幟幟たる棧道に曳き、全身を中平たる金場に終へん、と云々。

然れども敢へて執照を与へず、只だ案照を与へて迺ち留む。独り想ひを竺天に勞すらく、時いまだ有らざるや、得、一に投ぜざるやと。ときに炎宋淳熙十四年丁未なり。

（岩波『日本思想体系一六、中世禪家の思想』五四頁）

というような、「仏法相承譜」の源流を訪ねての渡天の望みについて、榮西の多彩な側面を熟知していたであろう道元が、自らの入宋に当たって思い至らなかったはずはない。当

時、釈尊を追慕して仏教発祥の地インドに渡り、西天の八塔や諸処の靈場を巡礼しようとする志を起こしたのは榮西に限らない。『却癡忘記』(文曆二年(一一三五)長田筆録)によれば、『四座講式』を著して釈尊を偲んだ明恵(一一七三—一二三二)は、

又ワレハ天竺ナドニ生マシカバ、何事モセザラマシ、只五竺処々ノ御遺跡巡礼シテ、心ハユカシテハ、如來ヲミタテマツル心地シテ、学問・行モヨモセジトオボユ、

(岩波『日本思想体系一五、鎌倉旧仏教』一一一頁)

と伝えられるが、『春日大明神御託宣記』(喜海(一一七八—一二五〇)撰)でも、

去ヌル建仁年中ノ比、上人(明恵)恒ニ語テ曰ク、年来ノ本意ヲカヘリミレハ、幼少ノ昔ヨリ一ノ大願アリ、滅後二千余年、辺地末法ノ世ニ生レテ、如來在世ノ衆会ニモ漏レ、又三乗向果ノ道モ証人ソノ期ナシ、然トイヘトモ、如來懇ニ無上正法ヲモテ、滅後ノ形見ナリト契リ給テ、汝等勤精進、如我在無異トノタマヘリ、然ハ我等カタメニトムメ給ヘル聖教也、コレヲ習ヒ、此ヲ学ンテ如來ノ本意ヲシリ、滅後ノ恨ヲヤスムヘシ、モシ聖教修学ノツトメニ、其煩アリ、瑜伽觀念ノ行障リアラン時ハ、西天処々ノ遺跡、コレ滅後ノ所歸ナリ、上古求法ノ三蔵、コレカタメニ生ヲ輕クセリ、コレスナハチ、足歩ノ尋ヌルトコロナリ、何ソ必シモ生ヲ全クセム、シカレハ印土遙ニ隔ルトイフトモ、行カハ必スイ

釈迦信仰と道元禪(石川)

タラム、ソノ路險阻ナリトモ、死ヲモテ期トセハ、サラニソノ恐アルヘカラス、必ず西天ニ向テ歩ヲハコヒ、遺跡ヲタツネテ忘ラハケムヘシト云フ大願ヲ起セリキ、云々、

(日仏全八四—三五八頁)

と、榮西にも増して強い渡天の意志を有していた。このことは無住道暁(一一二六—一一三二)も『沙石集』卷一ノ五「神明慈悲ト智恵有人を貴給事」で、その後の明恵の渡天断念の経緯を伝えているが、史実性は別として、一群の仏教者の中で、渡天の話題が情熱をもって語り続けられていた様子を物語っている。

天童山に行くのが道元一行の目的であったとする説もある⁽⁶⁾。しかし、榮西の最もよき意味での理解者であった道元にとって、入宋によって実感できる最大の懐きは、榮西への回帰であり、榮西がめざした釈尊の故郷天竺への回帰である。すなわち、如浄との相見を前提しない次元での入宋の動機と入宋後の軌跡は、まるで榮西の足跡を辿る巡礼でもあるかのように江浙の諸山諸寺を経巡っている。道元が、天竺まで行く準備を整えていたなどとは考えなくてもよい。それは榮西の素懐であった渡天という大目的に、限りなく近づく一歩であったことは確実である。しかし、如浄との相見以後は、道元自身の著述は勿論、伝記類もすべて、それまでの一切の行動が如浄との出会いに収斂させられる⁽⁷⁾。

しかし、釈尊に繋がる事物への関心は依然として残り続けることは、強い関心を持って惟一西堂や宗月長老等からの、法眼下や雲門下の嗣書の領覽を受けていることや『正法眼蔵』「嗣書」の巻、過去七仏から唐土慧能までの「四十祖」を意識し、仏祖を礼拝頂戴するために西天唐土の諸師の名を連ねる意味は（『眼蔵』「嗣書」「仏祖」、聖念的にはインドに連なる確信の上に成り立つ。臨済や大慧には釈尊から何代目に当たるという表記は無いが、道元が高く評価する祖師にはそれが明記され、「正伝」ということが強調される。一方、インドへの志向については、むしろ、インドに渡る必要を認めなかったところに、道元の釈尊観を明らかにする手があると思われるが、生涯に涉って日本を「辺地」「小国辺土」と認識する意識裏には、天竺への憧憬は残り続けたと見るべきであろう。この自覚は、末法という時代認識とその超克という問題にもつながる。

『釈迦牟尼如来五百大願』の成立

道元の釈迦信仰の内実を窺う際の重要な手がかりに、平安期に『悲華経』に沿いつつ偽作された『釈迦如来五百大願』の問題がある。この『釈迦如来五百大願』はさらに、清凉寺式釈迦如来像とセットで普及したことも指摘されている。⁽¹⁰⁾

道元と清凉寺式釈迦像の関係は今のところ見出し得ないが、

『正法眼蔵』「出家功德」に見られる、この偽作の『釈迦牟尼仏（如来）五百大願』からの引用については、すでに触れたこともあり早急に改める部分は今のところない。⁽¹¹⁾ 該当部分とは次の如くである。

釈迦牟尼仏五百大願のなかの第一百三十七願、我未来、成正覚已、或有諸人於我法中欲出家者、願無障礙、所謂羸劣・失念、狂乱・橋慢、無有畏懼、痴無智恵、多諸結使、其心散乱、若不爾者、不成正覚。第一百三十八願、我未来、成正覚已、若有女人、欲於我法出家学道、受大戒者、願令成就。若不爾者、不成正覚。第三百十四願、我未来、成正覚已、若有衆生、少於善根、於善根中、心生愛染、我当令其於未来世、在仏法中、出家学道。安止令住梵淨十戒。若不爾者不成正覚。

しるべし、いま出家する善男子善女人、皆世尊の往昔の大願力にたすけられて、さほりなく出家受戒することをえたり。如来すでに誓願して出家せしめます。あきらかにしりぬ、最尊最上の大功徳なりといふことを。

（新版岩波文庫本四、七六―七八頁）

しかし、その後この問題に関連する論考が相次ぎ、筆者も指摘した『悲華経』本文からの引用とする説への疑問は、当然是正されることとなった。⁽¹²⁾ さらに、近年注目されている愛知県七寺所蔵一切経の中に、平安末書写にかかる『釈迦牟尼如来五百本願法門経』（巻下）という端本が存在することが報

告され¹³、これは明らかに高山寺本『釈迦如来五百大願』の異本であり、この偽作の經典にも異本があったことが知られるに至った(末木文美士氏の御教示による)。しかも、『悲華經』からの引用とされながら、現行の『悲華經』とは合致しない部分があることが指摘されていたが、『釈迦如来五百大願』はもとより、『悲華經』そのものにも異本が通用していたことが予想され、『釈迦如来五百大願』及び『悲華經』を根拠とする釈迦信仰の内容も、改めて問題とする必要が生じた。

ここで道元と『釈迦如来五百大願』、もしくは『悲華經』との関係で、一点だけ指摘して置くなら、『眼藏』「袈裟功德」における『悲華經』(経題は明記されていない)の引用で、それはまず、次の様な部分である。

世尊告大眾言、我往昔、在宝藏仏所時、為大悲菩薩。爾時大悲菩薩摩訶薩、在宝藏仏前、而発願言、世尊、我成仏已、若有衆生入我法中出家著袈裟者、或犯重戒、或行邪見、若於三宝輕毀不信、集諸重罪、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若於一念中、生恭敬心、尊重僧伽梨衣、生恭敬心、尊重世尊或於法僧、云々。

(新版岩波文庫本四、一三七～八頁)

傍線部分は、現行『悲華經』本文や高山寺本・七寺本にも見当たらない。次の、

若有衆生、共相違反、起怨賊想、展転鬪諍、(中略)念此袈裟、依袈裟力、尋生悲心、柔順之心、無怨賊心、寂滅之心、調伏善

釈迦信仰と道元禪(石川)

心、還得清淨。

(一四〇頁)

についても、諸本に傍線部分の「還得清淨」の四字は無い。さらに、

善男子、爾時大悲菩薩摩訶薩、聞仏讚歎已、心生歡喜、踊躍無量、因仏申此金色之臂、長作合縷。云々。(一四二頁)

の部分については、高山寺本には該当部分は無く、『悲華經』は「聞仏称讚已」あるいは「因仏伸此金色之臂、長指合縷」とするのに対し、七寺本は「讚歎」「因仏申此金色之臂、長指合縷」としており、道元所引の部分は、比較的七寺本に近いことが判明する。

本稿では、道元の入宋留学と渡天思想との心象的連関、及び『釈迦如来五百大願』の偽作とその普及に関する若干の事実の指摘に止める。他に、釈迦信仰の一形態である舍利信仰や、末法観をめぐる道元の対応等の問題があるが、これらについては稿を改め論じたい。

1 裕慈弘「鎌倉時代に於ける心常相滅論に関する研究」(『大正大学学報』三十四、一九四二年)、鏡島元隆「本証妙修の思想的背景」(『宗学研究』七号、一九六五年)、山内舜雄「道元禪と天台本覚法門」(大蔵出版、一九八五年)

2 石井修道『道元禪の成立史的研究』(大蔵出版、一九九一年)

3 山口瑞鳳「チベット学と仏教」(『駒澤大学仏教学部論集』十五号、一九八八年)、袴谷憲昭『本覚思想批判』(大蔵出版、一九八九年)、松本史朗『禅思想の批判的研究』(大蔵出版、一九

釈迦信仰と道元禪（石川）

- 九四年)
- 4 船岡誠『禅宗の成立』（吉川弘文館、一九八七年）
- 5 大久保道舟『道元禅師伝の研究』（岩波書店、一九五三年）
- 6 古田紹欽『道元の遍歴』（『正法眼蔵の研究』創文社刊、一九七二年）
- 7 石井修道「最後の道元―十二卷本『正法眼蔵』と『宝慶記』―」（『十二卷本『正法眼蔵』の諸問題』大蔵出版社、一九九一年）
- 8 伊藤秀憲『道元禅師の釈尊観』（『日本仏教学会年報』五十号、一九八五年）
- 9 『正法眼蔵』の伝衣・嗣書・行持・陀羅尼・礼拝得髓・洗面・出家功德・袈裟功德・四禅比丘等の諸巻に見られる。
- 10 成田貞寛「釈迦如来五百大願経の成立」（『印度学仏教学研究』一三巻二号、一九六五年）貞慶関与の峰定寺釈迦如来像の正治元年（一一九九）六月十日付の胎内文書中、牟尼阿弥陀仏の願文の記載により、この時期に五百条の大願経として成立し、広く普及していた。
- 11 石川力山「道元禪と浄土教思想―臨終正念と『悲華経』の引用をめぐって―」（『印度学仏教学研究』四〇巻二号、一九九二年）
- 12 野村卓美『『悲華経』と中世文学―『悲華経』と『釈迦如来五百大願』をめぐって―』（『国語と国文学』七〇巻八号、一九九三年）・野村卓美『『悲華経』と中世文学・再考―『釈迦如来五百大願』の成立と享受を中心に』（『北九州大学国語国文学』八号、一九九五年）
- 13 落合俊典「七寺一切経と古逸經典（貞元録不入蔵目録・東寺一切目録・七寺一切経現存目録三本対照表）」（『七寺古逸經典研究叢書第一巻、中国撰述經典（其之一）』所収、大東出版社刊、一九九四年）
- 14 三崎良周「神仏習合思想と悲華経」（『印度学仏教学研究』九巻一号、一九六二年）

〈キーワード〉 道元禪、渡天思想、五百大願、清涼寺式釈迦如来
 （駒澤大学教授）

新刊紹介

中村元選集「決定版」第二二巻

大乘仏教の思想

B 6版・九六〇頁・定価九、七八五円

春秋社・平成七年一月

中村元選集「決定版」第二六巻

ミーマンサーと文法学的思想

B 6版・六三四頁・定価七、四一六円

春秋社・平成七年九月